

## 社会経済と言語の関係について-独立以前セネガル-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2013-05-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木田, 剛 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/15907">http://hdl.handle.net/10291/15907</a>

## 社会経済と言語の関係について：独立以前セネガル

### Social Economy and Language in Senegal: Pre-independent Period

博士後期課程 商学専攻 2009年度入学

木 田 剛<sup>1</sup>

KIDA Tsuyoshi

「言語は、すでにできあがった自明の道具に過ぎず、単に使われるべくそこにあるだけの、受動的な手段だと思うにとどまる社会科学に本質的な発展はなく、また自らが社会科学として何をやっているのかを考えてもみもしない言語研究は学問ではないのである」

(田中克彦, 1991: 319)

#### 【論文要旨】

社会経済と言語との関係を考察するために、独立以前のセネガルの状況を概観する。この多民族国家では、多くのエスニック集団の中の民族語のひとつであるウォロフ語が社会を席卷している。このウォロフ語化現象には、次の社会経済的な要因が指摘される：1) 宗主国フランスによる植民地都市建設（特にダカール）、2) イスラム同胞団ムリッド教団の勢力拡大、3) 植民地政府やムリッド教団の影響のもと、商業的落花生農業の組織的な発展、4) 鉄道をはじめとする交通インフラの整備、5) 貨幣経済の浸透に伴う都市や農村への労働力移動、6) 移民や交通インフラに結びついた都市化現象。これらの要因は、直接的・間接的にウォロフ語使用に結びついている。植民地政策や宗教の発展は、20世紀前半のセネガル経済の構造を変化させただけでなく、社会言語状況に影響を与えた。この社会言語的現象はとりわけ落花生経済と密接に結びついていた。ここに言語と経済との関係を垣間見ることができる。

【キーワード】 ムリッド教団, 媒介言語, 労働力移動, 交通インフラ, 都市化

---

<sup>1</sup> 本稿を執筆するにあたり、福田邦夫教授、柿崎繁教授、諸上繁登教授、およびその他三名の匿名査読者の有益なコメントを頂いた。ここに感謝の意を表したい。無論、本稿に残るすべての誤りや限界は筆者に帰する。

## 【目次】

はじめに

1. 独立以前セネガルの社会と言語
2. 植民地化と社会言語状況
3. ムリッド教団と落花生経済
4. 都市化と労働力移動

おわりに

## はじめに

西アフリカの小国セネガルで驚くべき社会現象が報告されている。同国は他のアフリカ諸国同様多民族国家であり、40前後の言語があるといわれる。旧仏領植民地だったことから、現在フランス語が「公用語」(official language)になっており、この言語は特に行政や教育の分野で必要不可欠である<sup>2</sup>。ウォロフ語(wolof)を含むアフリカ起源の「民族語」の一部<sup>3</sup>が1971年に「国語」

図表 1：現在のセネガルの地域、主要都市、交通インフラ



出所：UNCS.

<sup>2</sup> 参照：Diouf (1994: 110)。この言語を読み書きできるセネガル人は10%にも満たない。Cisse (2005) によると、現在フランス語の勢力が急速に弱まっている。

図表 2 : 1960年の民族分布 (推定)

エスニック集団	総数	割合	主要居住地域 (植民地以前)
ウォロフ人, レブ人	1 145 000	36.8%	ワーロ, カヨール, バオール, ヴェール岬
セレール人	595 000	19.1%	シヌ, サルーム
トゥクロール人	422 000	13.6%	フータートロ, セネガル川流域
ブル人, ラオベ人	230 000	7.4%	バオール, 上カザマンズ, セネガル東部
ジョオラ人, バラント人, マンジャク人	216 000	6.9%	下カザマンズ
マリンカ人 (マンディンカ人)	198 000	6.4%	中カザマンズ
ソニンケ人	65 000	2.1%	セネガル東部
モール人 (ムーア人)	48 000	1.5%	セネガル川上流域
他のセネガル人	101 000	3.2%	各地
他のアフリカ人	29 000	0.5%	ダカール
全人口	3 110 000	100%	

出所 : Démographie Africaine. nov. -déc. 1986 (Diouf, 1994: 22) より作成。

(national languages) と定められたが、現在のところ教育言語にはなっていない。ところが、これら民族語のひとつであるウォロフ語が急速に広まり、ほぼすべてのエスニック集団が媒介言語として使用する「リンガフランカ」(lingua franca) になっている。一般にアフリカといえば、民族紛争が絶えないという印象をわれわれは持つが、セネガルでは1つ民族の言語が異民族の家庭内コミュニケーションとして使われるまで広がっている。すなわち、民族の垣根を越えた言語による国家統一が進んでいることを意味するともいえる。このことは、われわれがアフリカに対して抱いている「多民族国家」や「民族紛争地域」などの概念は現地人の現実とは異なり、認識を改めなければならないのだろうかという疑問を投げかける。それとも、セネガルのウォロフ語の拡散現象は植民地史の流れの中で起こった特異な現象であり、われわれ現代人がメディアを通してみるアフリカの現状とは無関係なのだろうか。これらの疑問に答えるためには、アフリカの社会経済史を再度検討してみる必要がある。この小論では、このような観点から民族と社会経済の関係を言語に特化して考察し、セネガルの状況を植民地以前に絞って概観してみたい。

## 1. 独立以前セネガルの社会と言語

セネガルで使用される言語は約40を数える<sup>4</sup>。「約40」と曖昧な表現をするのは、まだ言語学者からまだ発見されていないあるいは記述されていない言語があるからであり、さらにはある言語が分析されたあと、独立した言語というよりも、別の言語の方言と決定されることもあるからである。これと同じ理由で世界に現存する言語の数は言語学者によって異なる。一般に、一つのエスニック

<sup>3</sup> ウォロフ語に加えてブル語, セレール語 (Serer), マンディンカ語 (Mandika, あるいはマリンケ語 Malinké), ジョオラ語 (Joola, Jola, あるいは Diola), ソニンケ語 (Soninké) の6言語。2001年に他の5言語, 2002年に4言語が追加されており, 現在国語は合計24言語になっている。

<sup>4</sup> エスノログ (www.ethnologue/show\_country.asp?name=SN)。砂野 (2007: 49sq) はセネガルの言語数を「20余り」, McLaughlin (2008: 88) は「約25」としている。

集団は一つの言語を使用し、言語数が民族の数に相当する<sup>5</sup>。

セネガルの主なエスニック集団はウォロフ人を筆頭に、セレール人、トゥクロール人 (Toucouleur) も含むフルベ人 (Fulbe, あるいはプル人 Peul)<sup>6</sup>、ジョオラ人と続く (図表 2 参照)。一説によると、ウォロフ人、セレール人、レブ人 (Lebu, あるいは Lébou) は共通の祖先を持ち、民族移動の最中サハラ砂漠を通過する際に、一部はベルベル人 (Berber) と混淆してフルベ人になり、フルベ人とセレール人やレブ人との結合によりトゥクロール人が生まれたといわれる<sup>7</sup>。10世紀、これらの四大民族は、現在のセネガルとモーリタニアにまたがる地域にテクルール王国 (Tekrur, 現フータ＝トロ地方 Fouta＝Toro) を形成し、同一の言語を使用していたといわれる<sup>8</sup>。フルベ人、ベルベル人、マンディンカ人、ウォロフ人、セレール人、ウォロフ人は13世紀にワーロ地方 (Walo あるいは Waalo, 現サンルイ県とダガナ県とモーリタニアの南西部を含む地域) へ移動し、のちに一部は中北部のジョロフ地方 (Djolof, 現ランゲール県, Linguère) に移住した。ワーロ地方ではのちの民族分化が始まる。その内のひとつがラフ (Laf) という村落に住み、ラフの住人という意味の現地語「ワー・ラフ」(Waa Laf) がウォロフの名称の由来である<sup>9</sup>。その他、木彫に長けるラオベ人も生まれた。ジョオラ人の起源はバントゥ系という説とマンデ系という説があり、他の少数民族 (バイスク人、バランテ人、マンジャク人、マンカグネ人など) の住む下カザマンズに定住した。また、テンダ系といわれる少数民族 (バサリ人、コニアグィ人、ペディクス人、バジャランケ人) は、他の大民族とともにダカールなどの都市部に居住した。ソニンケ人はガディアガ地方 (Gadiaga, モーリタニア, マリ, セネガル東部をまたぐ地域) に居たが、セネガル全土に拡散する移動性の強い民族だった。

このように複雑に映るセネガル民族構成であるが、これをあえて分類するならば、1) テクルー

<sup>5</sup> 無論これに当てはまらないケースもある。例えば、同じ言語を話すルワンダのツチ人とフツ人はお互い民族的に異なると考えている (Cooper, 2008: 12sq)。

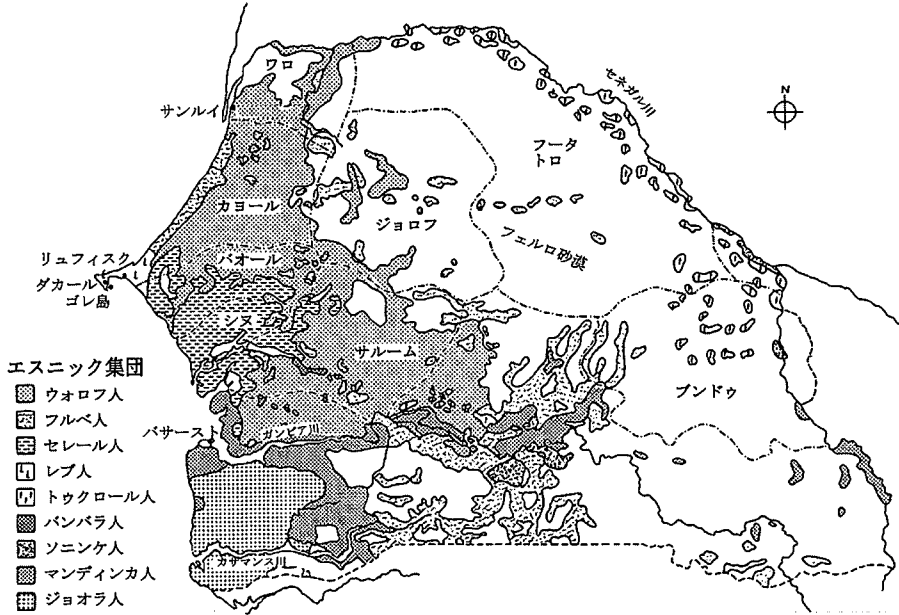
<sup>6</sup> 1988年の国勢調査から、両エスニック集団は「Haalpulaaren」(プラール語話者) として同様に扱われている。内外の論文には自称の「プル人/フルベ人」(単複: Peul/Fulbe) や、マンデ系言語話者による他称の「フラ人」(Fula), ハウサ語話者による「フラニ」(Fulani), 言語についても「フルフルデ語」(fulfulde), 「プラール語」(pular あるいは pulaar) などの用語が混在している (砂野, 2009: 6-7)。本稿では言語として「プラール語」に統一し、エスニック集団として「プル人」, 「フルベ人」, 「トゥクロール人」を適宜に使用する。

<sup>7</sup> 参照: Diouf (1994: 25-6)。ウォロフ人のエジプト起源に関しては、Cheikh Anta Diop (1960) の先駆的な研究がよく知られている。また、セネガル人の一部の祖先はインドにあり、民族移動の途上で当時まだ緑や肥沃な土地が残るエジプトのナイル川沿岸に一時期定住し、のちに西へ移動を続けたという説もあり、ウォロフ人、セレール人、フルベ人の共通性、あるいはこれらの民族のインドとエジプトとの接点は、言語的類似性の観点からも証明されている (Diouf, 1994: 65-6)。

<sup>8</sup> この点に関する研究は多い。例えば、セネガル初代大統領で、言語学者でもあるサンゴール (1983) は「プロト・セレール語仮説 (proto-séser)」を提示し、Fougeyrollas (1968) はウォロフ語が各民族の言語的紐帯だったと主張している。口承文学の成果も取り込んだ Klein (1968) の研究でも、遅くとも16世紀以前にウォロフ語が地域の媒介言語になっていたと提唱されている。

<sup>9</sup> 参照: A.-B. Diop (1981: 13-24), Diouf (1994: 26)。

図表3：セネガル1850年頃の民族国家とエスニック集団の分布



出所：Gellar (1976) より作成。

ル地方出身の北方民族（レブ人，セレール人，フル人，トゥクロール，ウォロフ人），2）マンデ系の民族（ソニンケ人，マリンケ人，ソーセ人，バンバラ人），3）先住民族（バイスク人，ジョオラ人，バサリ人，ティエス地方のヌーン人，ンドゥ人，サフェン人などの祖先）の三集団に大別されよう。しかし，セネガル社会には多くの民族交配が歴史的背景にあり，諸民族間の混血が進んでいたことから，セネガルにおける民族多様性は実質的というよりもむしろ表面的といえる<sup>10</sup>。

宗教においても民族性は見当たらない。のちに詳述するが，初期イスラームを伝えたマンディカ人（Manding）やモール人（Maure）がかつてウォロフ人の尊敬を集めたの対して，のちの19世紀にはウォロフ人の宗教指導者にセレール人が大きな敬意を払っていたというように，民族的な宗教の主導権争いがあったわけではない。また，セネガルに実在した王国や帝国（ワロ，カヨール，バオール，ソニンケなど）は首長が主要民族の出身で必ずしもないことや，その配偶者に異民族出身者が頻りに選ばれていたように，民族中心的な国体でなかった。紛争や衝突がエスニック集団間であることはなく，むしろある民族内における内輪もめにほとんど端を発していた<sup>11</sup>。

セネガル人の大半は今も昔も複数の言語を操る多言語話者であることに変わりない。ただし，ウォロフ人は伝統的にウォロフ語を母語として話し，セレール人はセレール語，フル人はフルール語を母語としていた。セネガル人の大多数はムスリムであるけれど，アラブ語を読み書きできる信者

<sup>10</sup> 参照：Diouf (1994: 30)。

<sup>11</sup> 参照：Diouf (1994: 31)。

は5%にも満たないというように、宗教が使用言語に決定的な影響を与えたわけではなかった。最も人口の多いウォロフ人はセネガル人口全体の40%前後に過ぎず、この割合は1900年から60年代に至るまでほぼ一定していた<sup>12</sup>。にもかかわらず、ウォロフ語が急速に広まり、現在においても国民の大多数が使用するリンガフランカになったのである。

## 2. 植民地化と社会言語状況

19世紀初頭、セネガルの主要輸出品はセネガル川流域 (Fleuve) のテックロール人商人たちが扱う天然ゴムだった。しかし、アジアにおける生産拡大の煽りを受けて国際競争力を失い、1850年頃からセネガルの天然ゴム貿易は衰退していった<sup>13</sup>。その一方で、落花生が19世紀後半にセネガルの主要輸出品になっていった。落花生栽培は1850年頃からウォロフ人居住地<sup>14</sup>で広まった。サンルイ (Saint-Louis) で落花生の栽培と取引は、カヨール王国のガンディオール (Gandiole) やディアンブール地方 (DiambourあるいはNdiambour, 現ルガ州) のウォロフ人商人たちの主導で始まった。フランス向け落花生輸出の始まりは、1840年、サンルイ港からルアンへ出帆した貨物船に積み込まれた70トンの落花生だった。

奴隷貿易の拠点として名高いゴレ島 (Gorée) やサンルイの商館<sup>15</sup>は、当時の欧州アフリカ貿易の拠点であった。ところで、19世紀半ばまで、アフリカとヨーロッパの間にはある意味で対等な貿易関係があった。すなわち、アフリカの支配者や首長はヨーロッパ列強間の商業競争を利用して、自国の利益に適う交易条件を提示することができたし、また、国内外に出入荷される商品に対して関税を引き上げることも可能だった。本格的な植民地化が始まるのは19世紀半ば以降、ルイ・フェデルブ (Louis Faidherbe) がセネガル総督に任命されて、サンルイを含むワーロ王国を征服した1855年である。

フェデルブの軍事介入の目的は、フランスの西アフリカ貿易を保護し、アフリカ人による貿易網や取引拠点の独占を終わらせることと、欧州列強の間で繰り広げられていた植民地獲得競争の中で、アフリカ大陸におけるフランスのプレゼンスを決定付けることだった。以後、植民地都市の建設が進められ、1880年前後にゴレ島、サンルイ、ダカル、リュフィスクは本国とほぼ同様の「市民権」(citoyenneté) が与えられる「特別行政四区」(Quatre communes) になった。ただし、

<sup>12</sup> ウォロフ語の拡大を最初に報告した調査結果は Wiolland & Calvet (1967) であるが、詳細を伝える入手しやすい文献として、Diouf (1994: 22sq), Dumont (1983: 25sq) などが挙げられる。

<sup>13</sup> 1907年の仏領植民地全輸出は天然ゴムが5%を占めていたのに対して、30%が落花生だった (Adam, 1908: 5)。

<sup>14</sup> ワーロ王国、カヨール王国 (CayorあるいはKayor, 現ルガ州、ケベメール県、ティヴァウアンヌ県、ティエス県を含む大西洋岸地域)、バオール王国 (BaolあるいはBawol, 現ジュールベル州とティエス州の一部)、およびサルーム王国 (Saloum, 現カオラック州) にまたがっていた。

<sup>15</sup> その他、リュフィスク (Rufisque), ポルチュダル (Portudal), ジョアル (Joal), ガラム (Galam) のサンジョゼフ城 (セネガル川上流) があり、混血人の貿易商會が奴隷を取引した。

図表 4 : 路線開設年

ダカール=サンルイ鉄道	操業開始年	ダカール=ニジェール鉄道	操業開始年
ダカール (Dakar)	1883	バンベイ (Bambeye)	1908
サンルイ (Saint-Louis)	1885	ジュルベル (Diourbel)	1908
コキ (Coki)	1929	ガンギネオ (Guinguinéo)	1909
ランゲール (Linguère)	1931	カオラック (Kaolack)	1911
		カフリン (Kaffrine)	1912
		クンゲル (Koungheul)	1913
		タンバクング (Tambacounda)	1915
		グディリ (Goudiri)	1922
		カイ (Kayes)	1923
		ムバケ (Mbaké)	1931

出所 : David (1980) より作成。

導入された「市民」(citoyen)と「臣民」(sujet)との区別に民族や宗教の基準であったわけではなく、単に市民の資格を得た者の大半は、ウォロフ人やレブ人などのウォロフ語話者だったに過ぎない<sup>16</sup>。1885年にセネガル西部を南北に走るダカール=サンルイ鉄道が開設されると、現在の株式会社に近い形態を持つ「貿易商社」(maison de commerce)が沿線に相次いで進出した<sup>17</sup>。これに伴い、以前まで天然ゴムを扱っていたポルドー人や「混血人」(métis)が1900年頃から落花生取引に移行した<sup>18</sup>。19世紀最後の20年間で、アフリカにおける新しい貿易構造の基礎が落花生を中心に形成されたのである<sup>19</sup>。

ところで、フランスの貿易商社は1900~20年の間にセネガル人個人独立商人と激しい競争を繰り広げていた。この頃、セネガル内陸部を東西を走るダカール=ニジェール鉄道<sup>20</sup>が開設され、セネガル東部からの輸送コストの大幅な減少が実現した(図表4参照)<sup>21</sup>。これがセネガル内陸部で

<sup>16</sup> ダカール、リュフィスク、ゴレ島の住民はレブ人だったが、ウォロフ人と共通祖先を持つ同族であり、ウォロフ語の方言を話す (Gellar, 1982: 99)。

<sup>17</sup> 「貿易商社」(maison de commerce, あるいは *campanie de commerce*) は、かつての東インド会社などの政府公認の「商館」(*comptoir*) と異なる。18世紀から19世紀前半にかけて、宮廷や国家に保護された商館が奴隷貿易や天然ゴム貿易を独占していた。19世紀後半、アフリカには商館の商人たちとは異なる独立した貿易商が存在していた。これらの商人が自由貿易の原則のもとに自己の利益を守るために組織化したのが「maison de commerce」だった。代表的なものに1832年に設立された「モレル=プロン商会」(*Maison Maurel et Prom*) が挙げられる。1862年に本国で可決された「会社法」(*lois sur les sociétés de commerce*) により制度化され、現在の株式会社のような形態になった。また、「資本運用法」(*lois sur l'exploitation de capitaux*) により企業経営が容易になった (Marfaing, 1992: 313)。

<sup>18</sup> 参照 : Amin (1971: 366)。

<sup>19</sup> 参照 : Marfaing (1992: 319)。

<sup>20</sup> レオポルド二世の特使として現地へ派遣されたヘンリー・スタンレーが、1976年頃にコンゴで矢継ぎ早に現地の首長と条約を結んだのを見て、フランスは西アフリカ諸国での存在を誇示するために、1879年にセネガル川上流部沿岸からニジェール川上流部沿岸へ進軍していた。この進出により地域の治安が維持され、鉄道建設や農業開発が可能になったといえる。のちにフランスが1884~85年のベルリン会議でセネガルや他のアフリカ諸国の主権を確保できたのも、この仏軍東部進出が契機となっている。したがって、フランスによる本格的なセネガル植民地支配は、1880年前後に始まったといつてよい (Fage, 1995: 331-332)。



落花生栽培地域を拡大する契機となり、仏系貿易商社はダカール=ニジェール鉄道沿線の駅を中心に取引所を開設しながらセネガル内陸へ進出していったのである<sup>22</sup>。これと並行して、通貨供給を円滑にする銀行も設立された。この結果、1920年頃にはセネガル人商人の数が激減した。鉄道はフランス人によるセネガル経済の独占を助長する役割を果たしたといえる。落花生経済の成立は、セネガルが近代産業時代の世界資本主義体制に組み込まれていく第一歩だった。

セネガルの落花生農業発展に利得を見る植民地政府にとって、交通インフラ(鉄道、道路、港湾)の整備は重要な政策だった<sup>23</sup>。このようなフランス人入植者に対する植民地政府の支援は、農業試験、研修、実演、品種改良を行う組織などを通して、セネガル人農民にも向けられた<sup>24</sup>。20世紀初期の落花生生産の90%以上はダカール=サンルイ鉄道とダカール=ニジェール鉄道の沿線地域で栽培された<sup>25</sup>。このように、軍事的支配やヨーロッパ・アフリカ間の定期海路を背景に、近代的な国内交通手段(鉄道、電報、道路)、銀行機関、株式会社制度の導入がセネガルで進行していった。のちに見るように、落花生は第一次世界大戦までにセネガルの基幹産業に成長していく。これは同時に、落花生に立脚したモノカルチャー貿易構造が第一次大戦までに確立していたことを意味する。

このように、ウォロフ人が多く居住する地域にセネガルの植民地都市が建設された。このため、さまざまなエスニック集団が集まるこれらの都市の市場では、ウォロフ語が異民族間を媒介する通商語として使用された。都市へ出稼ぎに来る農民は、一部が定住してウォロフ社会に溶け込み、一部がウォロフ語を習得して故郷の農村へ帰郷したのである。

### 3. ムリッド教団と落花生経済

落花生経済の成長の要因として、もうひとつ忘れてはならないものは、イスラーム同胞団のムリッド教団である<sup>26</sup>。ムリッド教団 (mouride あるいはムリディア muridiyya) は、フランスの植民

<sup>21</sup> マリ西部の主要駅カイから1月に到着した商品は、サンルイへ向かうセネガル川の輸送船に9月にしか積み荷されなかった。つまり輸送に最低8か月を要したことになる。ところが、ダカール=ニジェール鉄道開設のおかげで、バマコからカオラックの港への輸送は3日以下になった (Marfaing, 1992: 318)。かつて天然ゴム輸送で賑わったセネガル川を航行する北部輸送ルートは、ダカール=ニジェール鉄道の開設を機に衰退したのは明らかである。

<sup>22</sup> 参照: Amin (1971: 366-367)。Vanhaeverbeke (1970: 107) によると、輸送コストは1925年に平均73%、1925~35年に50%、1950~60年に17.5%にまで削減された。

<sup>23</sup> フランス政府の落花生貿易への力の入れ様は次の引用からも伺い知れる。「Pourtant, la situation économique en Europe est en pleine expansion, même si l'on assiste en 1905 à de mauvaises récoltes pour les arachides ou à des baisses de cours comme 1907/1908, l'ambiance est positive: conquête de nouveaux marchés, concurrence exaltante」 (Marfaing, 1992: 318)。

<sup>24</sup> 参照: Marfaing (1992: 317-8)。

<sup>25</sup> 参照: Gellar (1982: 13)。

<sup>26</sup> 詳細は例えば次を参照: Cruise O'Orian (1971), Copans (1988), Harrison (1988), Hanretta, (2009)。セネガルにはムリッド (あるいはムリディア, Muridiyyah) のほかに、ティジャーニア (Tijaniyya), カディリヤ (Qadiriyya), ライエヌ (Layène) の3つのイスラーム同胞団があるが、教条には大差はない。

地支配による伝統社会の急変に対する抵抗として、1880年代のバオール王国 (Baol) に興ったイスラーム同胞団である。現在でもイスラーム同胞団の中で、セネガル社会に最も大きな影響力を持つ宗教団体である。初期の主な活動地域は、発祥地のバオール地方をはじめ、カヨール地方、ジョロフ地方など、ウォロフ人が多く住む地域だった。フランスに敗れた王国の失業役人、貴族、兵士、小作農などが、彼らを取り巻く社会不安の中で、教団を心の拠り所にした<sup>27</sup>。すなわち、教団に所属する者は、物質的な奉仕や勤労と引き換えに精神的な恩恵を得たのである。勤労の対象は、のちに示す落花生農場での労働だった。

セネガルのイスラームはもともと多民族的だった。セネガルにおけるイスラームの起源は、フータ＝トロク地方で王国を形成していたトゥクロール人が11世紀に改宗したことがその始まりといわれる。15世紀から19世紀にかけて成立した各王国が植民地支配により解体されると、指導者マラブー (marabout) が民族間の結びつきを促進する役割を果たした。イスラームが異民族間の統一要素として機能したのである。セネガルへのイスラーム伝播には、かつてマンディカ人やモール人のマラブーが担い、ウォロフ人信者の大きな尊敬を集めた。19世紀後半にはウォロフ人マラブーがセレール人に尊敬されていた。ムリッドの教祖アフマドゥ・バンバ (Ahmadouあるいは Amadu Bamba) もモロッコ系のカディリア教団にもともと属していた。教祖がバオール出身のウォロフ人だったため、ウォロフ語がムリッドの主な使用言語だった。このようにムリッド教団はウォロフ色の強いイスラーム同胞団であったが、ウォロフ人以外のエスニック集団を排斥するものではなかった。これが異民族の教徒の間でもウォロフ語が広まる理由だったといえる<sup>28</sup>。

ムリッド教団の落花生農業への関わりを簡単にいえば、末端の信者に土地を貸与して信仰と引き換えに労働を課すというものだった<sup>29</sup>。土地所有者は指導者マラブーであり、直属の信者ターリベ (talibéあるいは taalibe) は井戸を掘って開墾を進めた。そこに「ダーラ」(daara) と呼ばれる農業共同体が形成され、マラブーはその首長になり、ターリベは一般の農民と変わりなくなっていった。ムリッドへの所属は精神面だけでなく、雇用、集団の安全保障、社会的ネットワークなどの物質的・社会的な恩恵があった。

19世紀末にダカール＝サンルイ鉄道の開通したカヨール地方では、過剰な農地開発のため、信者に与える耕作地が枯渇しつつあった。しかしながら、教団を継続するには土地がさらに必要だった。ところで、19世紀に反イスラーム政策を採っていたフランスは、1915年前後に協調路線に転換し、イスラーム同胞団を支援するようになっていた。ムスリムによる落花生農業の拡大は、植民

<sup>27</sup> 参照：Couty (1982: 314)。

<sup>28</sup> 1912年の国勢調査によると、信者の数が約6万8350人と推定されているが、その内の約9割はバオール地方(3.3万人)とカヨール地方(2.8万人)の住人、すなわちウォロフ人であり、その他、ティエスの5080人を筆頭に、ルガヤシヌ＝サルームに千人規模のムリッド共同体が報告されている (Cruise O'Brien, 1971: 59; Copans, 1988: 83, n11)。これらの小さな共同体は、のちの教団の発展拠点に一致する。

<sup>29</sup> 直属ターリベと一般信者の末端ターリベの区別を含むムリッド教団の社会構造は、Cruise O'Brien (1971)の研究で明らかにされている。

地経済に資すると考えたからである。イスラーム同胞団も植民地政府に積極的に協力し、「間接統治」の担い手となっていった<sup>30</sup>。

このフランスの支援を背景に、ムリッド教団は直属信者ターリベを派遣して落花生耕作地を拡大していった。セレール人の住むシヌ地方 (Sine, 現ファティック州にはほぼ相当), あるいはバオール地方への入植を拡大させた。バオールでは、放牧を営むフルベ人と土地を巡ってしばしば対立した。この地方には、1907年に建設が始まっていたダカール=ニジェール鉄道が通る。植民地政府は落花生栽培のために土地を取得しようとするマラブーを支援し、フルベ人は北に位置するフェルロ砂漠の方へ次第に押しやられていった。こうしてバオールに残るフルベ人の伝統的牧草地には、次第にムリッド教団の落花生農家が入植していったのである<sup>31</sup>。1927年11月1日～1928年10月31日の地域別出荷高を見ると、カヨール南部のティエス地方が81500トン、バオール地方が79500トン、カヨール北部のルガ地方が55500トンと、セネガルの落花生出荷の大半を占めていた<sup>32</sup>。1930年代から40年代にかけて、ムリッド教団は「新天地」(Terres Neuves) を求めてサルーム地方 (Saloum, 現カオラック州) や東セネガルへ向けた入植を続けた。シヌ=サルーム地方の信者の数を見ると、1912年の約1000人から1950年代には約7万人にまで膨れ上がり、1912年に信者のいなかった東部にも、1950年代にはタンバクンダ (Tambacounda, 6000人), バケル (Bakel, 1000人), ケドゥグ (Kédougou, 500人) の各都市で信者の存在が確認されている<sup>33</sup>。

このような「ムリッド荘園」の拡大は、セネガルの落花生栽培地域の拡大状況に一致する (図表5参照)。ダカール=サンルイ鉄道の開設時の主な栽培地域がウォロフ人居住地域カヨール地方とバオール西部の鉄道沿線地帯だけだったのが、ダカール=ニジェール鉄道の開設に伴い、南方のシヌ地方やバオール地方東部、サルーム地方などの東方へと広がった。落花生栽培に適した土壌、広大な土地、ふんだんな降水量、交通の要所のカオラック、重要な港など、良い条件が揃っていたからである。ダカール=ニジェール鉄道の開設により、取引所は南部に移設され、上フルーヴ地方の落花生取引は衰退していった<sup>34</sup>。また、両鉄道沿線地域の生産は全体の90%を越える一方で、鉄道の通っていないフータ=トロ地方、東セネガルの南部、カザマンスで生産された落花生は換金作物になりえなかった。

こうして、セネガルの落花生生産<sup>35</sup> と栽培地域は20世紀に入ってから着実に増加していった (図表6参照)。1841年、リュフィスク港からフランスのルアン港の落花生製油所へ向けて出荷された70トンの初荷以来、落花生輸出は1900年に9万トン、1965年に100万トンを越えるまで成長

<sup>30</sup> 参照: Coquery-Vidrovitch, Moniot (1974/2005: 161)。

<sup>31</sup> 参照: Couty (1982: 312-313), Gellar (1982: 13)。

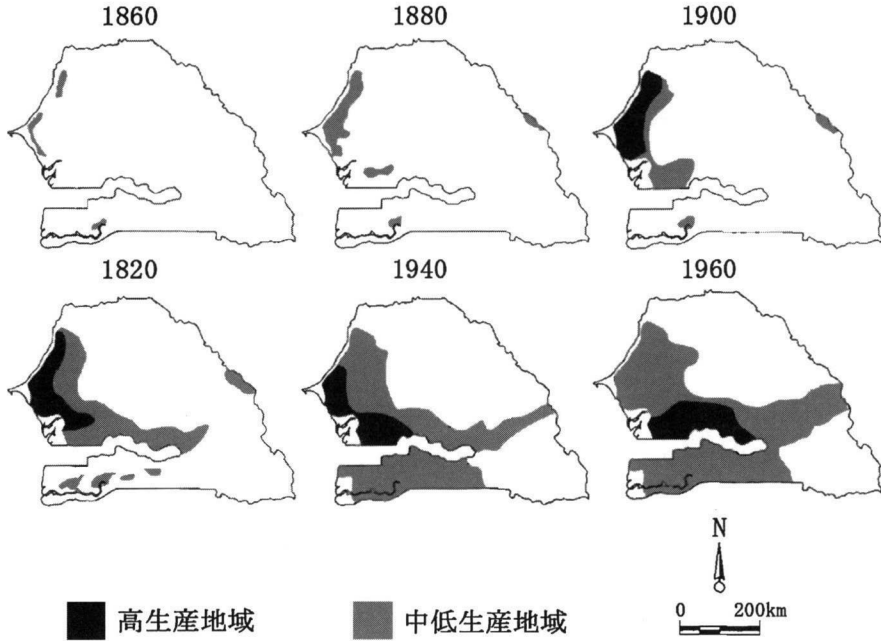
<sup>32</sup> 参照: Musset (1930: 555)。同時期の仏領スーダン (現マリ) からは2万トンが出荷されていた。

<sup>33</sup> 参照: Cruise O'Brien (1971: 77)。1950年代のムリッド教徒の全体数は、1912年の6倍 (42万人余り) になっている。

<sup>34</sup> 参照: Marfaing (1992: 316)。

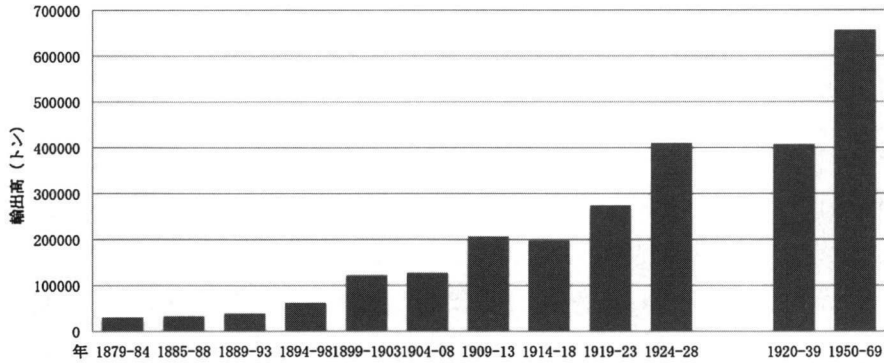
<sup>35</sup> セネガルの1914年生産高が30万トンであるので、生産の三分の二が輸出されていたことになる。

図表 5 : セネガル落花生栽培地域の変遷 (1860~1960)



出所 : Sidibé (2005: 62) より作成。

図表 6 : セネガル落花生輸出高 (1879~1969)



出所 : Bulltin mensuel de l'Agence économique de l'AOF, avril 1929 (Musset, 1930) より作成。

した。この輸出増を率にすると、1885年~1914年は8.8%、1918年~1940年は2.7%、1940年~1950年は停滞、1950~60年は7.7%の成長に相当する。

セネガルの落花生経済の発展は、行政区分の再編や社会構造の変化をもたらした。ムリッド教団の活動は落花生経済に関連する雇用を生み出した<sup>36</sup>。これに伴い、さまざまなエスニック集団（ウ

<sup>36</sup> 1950年代に全生産高に占めるムリッド生産の割合は約25%といわれるが (Copans, 1988: 98)、ムリッド影響下の落花生生産はこれより大きいと思われる。

ウォロフ人、トゥクロール人、ブル人、トゥルカ人など）の農民が、20世紀前半において落花生栽培のために、サルーム地方に多数移住している<sup>37</sup>。また、「ナヴェタンヌ」(navétane) と呼ばれる隣国からの出稼ぎ労働者の間でもウォロフ語が広がった<sup>38</sup>。セネガルの国土が比較的平坦であるという地理的要因により、人口移動が容易だったこともあるが、落花生輸送のためにフランスが建設した鉄道が、これらの地域内労働力移動を後押しした。鉄道網は商品の輸送だけでなく、人々の移動を活発化させたのである<sup>39</sup>。別の地域からムリッド教団の影響下の地域に移動してきた労働者は現地で使用される言語を理解しなければならず、セネガルの落花生栽培地域ではウォロフ語が主要言語になっていったのである。

その一方で、中カザマンス地方では、イスラームの布教を行ったのがマンディカ人だったことから、マンディカ語の使用が拡大し、土地の媒介言語になった。首都セディウ (Sédhiou) では、マンディカ語がジョオラ人、プラール人、ウォロフ人、バンバラ人などの間でリングフランカとして話されている<sup>40</sup>。このように20世紀前半に観察される社会言語的状況の変化には、鉄道や落花生農業の植民地政策だけでなく、それらと組合わさった宗教的な要因が重要な役割を果たしたといえる<sup>41</sup>。

このように落花生栽培を宗教活動の中心に据えたムリッド教団は、植民地政府に支援されて農地を拡大していった。教団が進出していった地域には、落花生農業とイスラームが浸透していった。開発政策のもとで建設された交通インフラが落花生の生産地を優先したことから、落花生を中心に人と商品の交流が盛んになり、ウォロフ語の伝播はさらに促進された。落花生栽培は植民地時代の基幹産業になった。その副産物がウォロフ語の拡散だったのである。

#### 4. 都市化と労働力移動

20世紀前半のセネガル南部や東部における落花生栽培の飛躍は労働力需要を生み出し、カヨール地方のウォロフ人や他の住民がサンルイや北部から、雇用のある農村地域に移動しはじめた。1940年までに、落花生生産に従事する農民の人口は全体の三分の二までになっていた<sup>42</sup>。このような農村地域の動向は都市部にも変化をもたらした。かつてセネガル経済の中心地は奴隷貿易時代の

<sup>37</sup> 参照：Sidibé (2005: 21)。

<sup>38</sup> 参照：Diouf (1994: 67)。ナヴェタンヌは「雨期の人々」という意味で、主にマリ、ギニア、ブルキナファソから来る季節労働者を指す (Roch, 1975: 59)。この労働力移動は19世紀後半に表れ、現在も続いている。1938年のナヴェタンヌの数は7万人と推定されている (Gastellu, 1981: 664)。最も詳細な研究は David (1980)、および Rocheteau (1975)、Dubois (1975) であるが、西アフリカ労働力移動研究に関するさまざまな文献にも頻出する名称である (例えば、Swindell, 1985; Guilmoto, 1997; Manchelle, 1997; Fall, 2004)。

<sup>39</sup> 植民地時代の仏領西アフリカの鉄道網の四分の一はセネガルに建設されている (Diouf, 1994: 77-78)。鉄道に伴い道路、港湾、電報システムの整備も行われた。ただし、道路整備が本格化するのには、輸送手段として機能するようになってからである。

<sup>40</sup> 参照：Diouf (1994: 58)。

<sup>41</sup> セネガルのキリスト教会では、19世紀末以来、信者がウォロフ人でなくとも教会のミサやミッション・スクールでウォロフ語が使用されている (Diouf, 1994: 71)。

<sup>42</sup> 参照：Gellar (1982: 14)。

図表7：西アフリカ諸国の都市人口の割合と最大都市が都市人口に占める割合（1950～65）

国	最大都市	都市人口割合 (%)				最大都市割合 (%)			
		1950	1955	1960	1965	1950	1955	1960	1965
セネガル	ダカール	17.2	20.0	23.0	26.4	48.2	43.7	49.8	50.5
ガーナ	アッカ	15.4	19.1	23.3	26.1	21.9	22.7	23.7	23.4
マリ	バマコ	8.5	9.7	11.1	12.6	24.5	24.8	23.2	22.7
ニジェール	ニアメ	4.9	5.3	5.8	6.8	20.4	25.0	30.6	33.3
リベリア	モンロヴィア	14.0	15.6	18.6	22.1	14.2	23.7	38.1	44.4
ナイジェリア	ラゴス	10.2	12.3	16.2	20.1	8.7	9.4	10.4	11.2
コートディヴォワール	アビジャン	10.0	13.1	17.7	24.5	26.0	32.9	31.5	29.9
西アフリカ平均		9.8	11.8	15.1	18.6				

出所：UN Population Division of the Department of Economic and Social Affairs, *World Population Prospects: The 2008 Revision and World Urbanization Prospects: The 2009 Revision*. より作成。

図表8：輸出港別落花生出荷高（1927年11月1日～1928年10月31日）

鉄道による搬入	出荷高 (t)	鉄道以外の交通手段による搬入	出荷高 (t)
カオラック港	121 280	フンディウーニュ港 (Foundiougne, サルーム川)	40 609
リュフィスク港	94 499	ジガンシヨール港 (Ziguinchor, カザマンズ)	30 788
ダカール港	71 565	ムブール港 (M'bour)	17 980
サンルイ港	10 000	ジョアル港 (Joal)	2 887

出所：Musset (1930: 555) より作成。

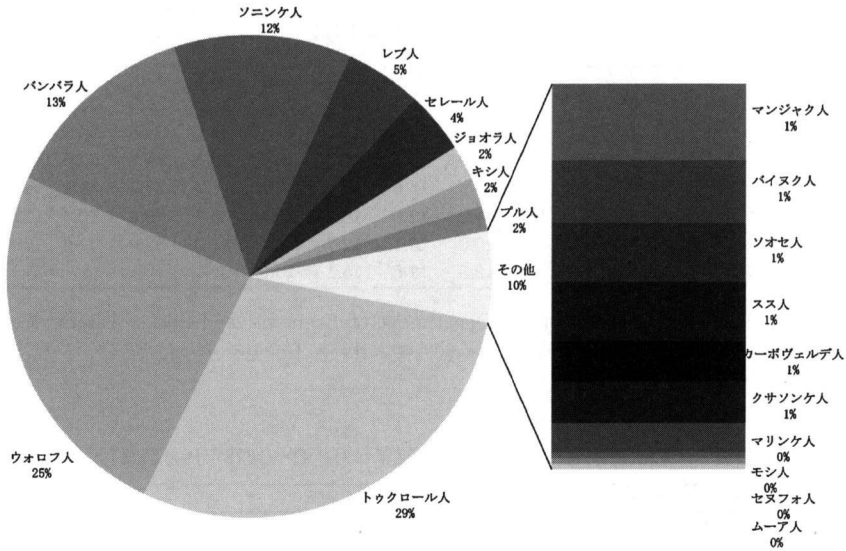
1659年に建設されたサンルイだったが、ダカールが1902年に仏領西アフリカの首都となって以来、中心的地位を引き継いだ。鉄道の到来とともに近代化が進んだダカールには資本と人口が集中し、西アフリカ最大の都市になった。入手できる統計を見ると、セネガルは1950年に西アフリカ平均の約二倍の都市化率を誇り、その都市人口<sup>43</sup>の中でダカールは約半数を占めている（図表7参照）。これはダカールの都市化がかなり以前から進行していることを示している。

また、ダカール近郊のリュフィスクの発展も著しい。リュフィスクはウォロフ人の住む小さな漁村だったに過ぎないが、ポルトガル人により商館が建設された後、前述した通り、フランス植民地政策のもと1880年に市民権のある特別地区に指定されて以来大きく発展した。1927/28年の落花生輸出を見ると、リュフィスク港がサンルイ線のケベメール駅以南とニジェール線のティエス＝バンベイ間の積み荷を輸出している（図表1参照）。1920年後半に、リュフィスクはダカールを抜いてセネガル第二の落花生輸出港になっており（図表8参照）、ダカールの重要な衛星都市だったことを示している。また、カオラックの都市化はさらに顕著である。カオラックの人口は1903年に300人に過ぎなかったが、サルーム川に位置する港の発展により、1936年に4万人までに急増している<sup>44</sup>。カオラック港はジュールベル以東のほぼ全ての落花生輸出を請け負うことで、セネガル最大の港にまで発展した（図表8参照）。

<sup>43</sup> 国連の定義する「都市人口」とは75万人以上の自治体の人口を指す。

<sup>44</sup> 参照：Deschamps (1964: 72), Marfaing (1992: 318)。

図表 9 : ヴェール岬州の 3 油製造工場と 1 ビール工場における民族分布 (1950年代)



出所 : Hauser (1954) から作成。

このような換金作物中心の経済は、三つの現象を伴った。1) 換金作物農業は落花生栽培地域と一致する、2) 換金作物のない地域では自給自足農業が営まれたとはいえ、この地域への貨幣経済の浸透が農村民の出稼ぎ労働へのインセンティブになる、3) 植民地銀行や貿易商社の本部が集まるダカルへ近代的な産業が集積する (サンルイ, リュフィスク, 他の内陸都市もこの傾向にあった)<sup>45</sup>。

セネガルの都市の特徴は、カメルーンのヤウンデのような都市やナイジェリア国内の都市と異なり、民族による棲み分けがない<sup>46</sup>。また、知識人階級や管理職は大部分ダカルに集中したけれども、ルワンダのように特定のエスニック集団がある社会的地位を独占しているわけではなく、また植民地時代のヴェール岬州にはトゥクロール人が多いとはいえ、各階級に異なる民族が混在していた。例えば、ヴェール岬州にある 3 落花生製造工場と 1 ビール工場における調査 (図表 9 参照) を見ると、製造業労働者における民族差は特に見られない。あえていえば、ウォロフ人やレブ人は事務職、職工、非熟練労働者の全職種にまたがるが、トゥクロール人やバンバラ人は職工 (ouvrier)、セレール人やソニンケ人は非熟練労働者 (manœuvre) である傾向にある。けれども一般にそれぞれのエスニック集団は各職種にあまねく広がっていた<sup>47</sup>。このようにダカルにおける民族的な可動性は、地理的かつ社会的なものだったといえる。

また、都市における多民族状況は婚姻においても垣間見ることができる。1950年代にダカル

<sup>45</sup> 参照 : Gellar (1982: 14)。

<sup>46</sup> 参照 : Éla (1983: 51), Diouf (1994: 80)。

<sup>47</sup> 参照 : Diouf (1994: 83)。独立後、社会階層の移動性はさらに大きくなったといわれる。

とティエスの924所帯で行われた調査<sup>48</sup>によると、696の単妻所帯の内、異族婚はダカールが29%であり、ティエスが23%だった。これを民族別に見ると、バンバラ人、レブ人、テクロール人の夫は異民族の妻と結婚することが多く、バンバラ人の場合は両都市で半数を越えていた。また、管理職、教師、自営業者など、知識階級に属する社会層の方が異族婚をする割合が高かった。これらの職種が都市部に多いことから、異族婚が都市化現象に関連していたことを示している。

ここで問題になるのは、これらの都市化あるいは多民族状況とウォロフ語との関係である。これに関して、ダカール大学応用言語学研究所が1963～64年に、ダカール中心部および近郊にある360の小学校に通う35434人の低学年児童（6～7歳）を対象にした調査報告書が参考になる<sup>49</sup>。それによると、96.6%の児童がウォロフ語を話すという結果が出た。四分の三はウォロフ語が家庭の第一言語であり、その内、一人でも親にウォロフ人がいれば（全体の17.4%）、ほぼ100%ウォロフ語が家庭で話されていた。さらに、ウォロフ人以外の民族同士の家庭でも、16.4%がウォロフ語を使用していた。1960年代のダカールでは、さまざまなエスニック集団の母語が自分たちの民族語ではなく、すでにウォロフ語になりつつあったのである。残りの四分の一の児童は、フラニ語が11%、バンバラ語が4.5%、セレール語が3.5%、ジョオラ語が2.1%、ポルトガル系クレオールが1.5%、ソニンケ語が1.2%、それぞれ母語であった。この数字は児童の所属エスニック集団を示しているが、将来これらの民族言語が母語の地位を失いながら第二言語になろうとしていたことは想像に難くない。

ウォロフ語拡散現象はダカール以外の都市でも報告されている。例えば、下カザマンズ地方のジガンシヨール県はジョオラ人が優勢な地域であるが、1963/64年の国勢調査によると、ウォロフ語話者数が県平均の17.3%に対して、県庁所在地のジガンシヨール市ではこの数値が80.9%になっている。ジョオラ人の多いジガンシヨール市で、ウォロフ語話者の数はウォロフ人の三倍に及ぶ一方、ジョオラ語話者数は第三位に過ぎない<sup>50</sup>。この他にウォロフ語話者が多い所は、ヴェール岬、ティエス、シヌ＝サルーム、ジュルベルなどの人口密度が高い地域であった。

このように、セネガルで進行していたウォロフ語化現象は、都市化と同時に進行した現象であるといえる。この二つの現象の因果関係を説明することは容易でないが、季節出稼ぎや定住を含めた労働力移動が関係していると考えられる。19世紀末から20世紀初頭にかけて、セネガルの少数民族だけでなく、隣国からの出稼ぎ労働者へもウォロフ語が広がっていた。ウォロフ語は、セネガルの商業取引においてすでに20世紀初頭から優先的に使用されていた。セネガルの多民族状況の中で、地方の農村あるいは隣国から都市へ来た移民は、古くからある都市の媒介言語であるウォロフ

<sup>48</sup> 参照：Mercier (1960: 35-36)。

<sup>49</sup> 参照：Calvet, Wioland (1967)。

<sup>50</sup> 参照：Diouf (1994: 63)。のちにウォロフ語化現象に対抗する地域主義がおこり、現在の下カザマンズではジョオラ語がリンガフランカとして使用されている。ジョオラ語は、しばしばジュラ語 (Dioula) と混同されやすいが、言語系統が異なる。



語を習得せざるをえなかったのだろう。都市に移住する移民が異民族間に共通の言語としてのウォロフ語が社会生活に必要な不可欠だったのである<sup>51</sup>。こうしてウォロフ語拡散現象は、労働力移動に結びついた都市化と密接に関係していたと考えられる。

## おわりに

歴史的に見ると、セネガルの多民族社会の基底には同一の祖先を持つという遺伝子的な背景があった。しかし、長い時間をかけた内的な変容過程を経て、異なるエスニック集団に分化していき、各集団が固有の言語を持つに至った。各個人が持つこの言語観は、共同生活におけるそれぞれの共同体メンバー同士のコミュニケーションの中で培われ、民族意識を形成しながら、かなり最近まで維持されてきた。これが西欧との接触以来、とりわけ19世紀後半の植民地時代から再び変容していくのである。本稿ではこの過程をセネガルの独立期まで概観した。

本稿で見たウォロフ語拡散現象は、さまざまな社会的、経済的、政治的要因により説明される。これをまとめると、次の6つの点が挙げられる。

### 1) 「植民地都市建設」:

歴史的な偶然であるにせよ、旧宗主国による西アフリカ植民地化の拠点がウォロフ人の居住する地域であった。サンルイやダカル、その他の行政特別四区などがそうだった。

### 2) 「宗教の発展」:

植民地化はセネガルの各王国にあった伝統社会を崩壊させた。これに伴う社会不安の高まりを背景にムリッド教団が興り、ウォロフ社会を越えたセネガル住民をイスラームで懐柔していった。ウォロフ語は宗教伝播のコミュニケーション手段だった。

### 3) 「組織的な商業農業」:

落花生の国際需要<sup>52</sup>を背景に、換金作物としての落花生農業がセネガル植民地経済の基幹産業に成長していった。勤労を教条の中心に据えたムリッド教団と経済発展を目論む植民地政府との間で利害が一致していた。また、換金作物を取り扱う貿易商社やその取引所も、鉄道沿線を中心に設立された。ウォロフ語は通商言語となった。

### 4) 「交通インフラの整備」:

ダカル=サンルイ鉄道とダカル=ニジェール鉄道は、輸送コストの削減を実現した。鉄道網の発展とともに、港湾、道路、通信などのインフラも整備された。インフラ整備は物流の拡大を可能

<sup>51</sup> 参照: Lasnet (1900: 112), Marty (1917, t2: 61), Pellissier (1966: 453), Diouf (1994: 68)。独立後、下カザマンスや東セネガル出身のエスニック集団がダカルを含むヴェール岬州へ多く移住してきた。現在のダカル人口の9割以上は地域外出身者である。ダカルの都市化は人口の自然増よりも他の地域からの人口流入が主因である (Diouf, 1994: 81)。

<sup>52</sup> 当時、落花生油の需要の伸びは、食用油としてというよりも、むしろ缶詰の保存用油や石鹼の原料として食品産業や軽工業からだった。

にただだけでなく、人々の交流が盛んになった。

5) 「都市や農村への労働力移動」:

貨幣経済が浸透した農村部から、住民は賃金労働を求めて都市部や雇用のある農村部へ移動せざるをえなかった。交通インフラの発展が労働力移動を加速した。これに伴い、都市部や農村部でウォロフ語が異民族間の媒介言語として発展していった。

6) 「都市化」:

初期の植民地都市ダカールの行政機能が拡充され、他の特別行政四区でも法整備が進んだ。これらの都市では商業の拠点として発展し、海運に特化した港湾都市や換金作物の取引の拠点都市も発展した。これらの都市に集まるさまざまなエスニック集団の移民にとって、ウォロフ語は媒介語だった。

これらの点の中で、フランスによる植民地政策とムリッド教団の活動は、20世紀前半のセネガル経済の構造を変化させただけでなく、人々が選択する使用言語にも多大な影響を与えた。これが本稿で見たウォロフ語化現象である。この社会言語的現象の中で、中心的な役割を果たしたのが落花生経済であったといっても過言でないだろう。ここに言語と社会経済との関係を垣間見ることができる。未解決な問題もある。社会における言語的状况の変化により経済が発展したのか、それとも経済が発展したから、社会言語状况が変容を遂げたのかという疑問である。

上に挙げた要因を振り返ると、セネガル社会におけるウォロフ語化現象は、植民地化による単なる外因だけで説明できないことがわかる。植民地化はムリッド教団を誕生させたが、のちに教団は勢力を存続させるのに、換金作物生産に積極的に関わりながらその経済管理システムの一部を担った。教団と利害が一致した植民地政府はこれを強力に支援し、間接統治のシステムが成立した。このように、植民地時代において、外圧・外因は内的ダイナミックと複雑に絡み合っていた (Cooper, 2008; 木田, 2011)。セネガルにおけるウォロフ語化は、その時代において社会が外因と内因をともに咀嚼して出した一つの解答なのであった。したがって、言語の経済決定論や経済の言語決定論という議論はあまり意味がないであろう。むしろ、方法論として、言語的側面と経済的側面を社会 (あるいは国家) と構成する重要な要素とみなしながら、常に同時に社会科学の分析に取り込むことがここでは重要であるといえる。

本稿では主に独立以前のセネガルの状況を扱った。この時代には落花生農業が基幹産業だった。しかし、セネガルの落花生農業は1965年に衰退が始まり、経済低迷の兆しが見られる<sup>53</sup>。けれども、ウォロフ語の拡大は独立後も続き、独立以前よりもその深化はさらに大きいといわれる<sup>54</sup>。独立以後、もし経済が停滞していたとすると、どのような要因で言語の統一化が進行していったのだ

<sup>53</sup> セネガルにおける取引量 (commercialisé) は以下の通りである: 1964/65年=101.1万トン, 1965/66: 78.6万トン, 1966/67: 83.4万トン, 1967/68: 59.8万トン)。また、交易条件も悪化している (落花生100キロあたりの米の交換量): 1913=110 kg, 1931年=42.8 kg, 1956年=50 kg, 1968: 34 kg。これらの値は、Vanhaeverbeke (1970) データより Amin (1971: 31) が算出したものである (Copans, 1988: 96)。

ろうか。経済的な効率性とは関係のない社会言語状況が形成されたのだろうか。他の民族のアイデンティティを犠牲にして経済発展を求める国家建設というモデルが機能しなくなったのだろうか。宗教が社会や経済に占める位置はのどのように変化したのだろうか。セネガル社会経済とウォロフ語化現象との関係は独立後に変質したのだろうか。このような独立以後の言語と社会経済との関係をさらに考察するのが、次に取り組むべき研究課題である。

#### 【参考文献】

- Adam, Jean. 1908. *Les plantes oléifères de l'Afrique occidentale française. I L'arachide, culture, produit, commerce, amélioration de la production*. Paris, Challamel.
- Amin, Samir. 1971. *L'Afrique de l'Ouest bloquée*. Paris, Minuit.
- Cisse, Momar. 2005. Langues, état et société au Sénégal. *Sudlangues* 5, pp. 99-133.
- Cooper, Frederick. 2008. *L'Afrique depuis 1940*. Paris, Payot (tr. fr. de: *Africa since 1940: The past of the present*. Cambridge, Cambridge University Press).
- Copans, Jean. 1988. *Les marabouts de l'arachide: La Confrérie mouride et les paysans du Sénégal*. Paris, L'Harmattan, 279 p. (1ère éd. in 1980)
- Coquery-Vidrovitch, Catherine; Moniot, Henri. 2005. *L'Afrique noire de 1800 à nos jours*. Paris, PUF (1ère éd. in 1974).
- Couty, Philippe. 1982. Les mourides et l'arachide au Sénégal. *Revue Tiers Monde* 23, pp. 311-314.
- Cruise O'Brien, Donal B. 1971. *The Mourides of Senegal: The Political and Economic Organization of an Islamic Brotherhood*. Oxford, Clarendon Press.
- David, Philippe. 1980. *Les navétanes. Histoire des migrants saisonniers de l'arachide en Sénégal des origines à nos jours*. Dakar-Abidjan, Les Nouvelles Éditions Africaines. 527 p.
- Deschamps, Hubert. 1964. *Le Sénégal et la Gambie*. Paris, PUF.
- Diop, Abdoulaye-Bara. 1981. *La société wolof, tradition et changement. Les systèmes d'intégralité et de domination*. Paris, Karthala. 358 p.
- Diop, Cheikh Anta. 1960. *L'Afrique précoloniale*. Paris, Présence Africaine.
- Diouf, Makhtar. 1994. *Sénégal: les ethnies et la nation*. Paris, L'Harmattan.
- Dubois, Jean-Pierre. 1975. Les Serer et la question des Terres Neuves au Sénégal. *Cahier ORSTOM*, séries. Sciences Humaines, 12 (1), pp. 81-121.
- Dumont, Pierre. 1983. *Le français et les langues africaines du Sénégal*. Paris, ACCT (rééd. in 2000: Paris, Karthala, Coll. «Dictionnaires et Langues»). 151 p.
- Éla, Jean-Marc. 1983. *La ville en Afrique noire*. Paris, Karthala.
- Fage, J. D. 1995. *A History of Africa*. London/New York, Routledge. 3rd ed. x + 595 p.
- Fall, Papa Demba. 2003. *Migration internationale et droits des travailleurs au Sénégal*. Paris, UNESCO.
- Fougeyrollas, Pierre. 1968. Le devenir des valeurs et des attitudes. *Dakar en devenir*. Paris, Présence Africaine.
- Gastellu, Jean-Marc. 1981. L'égalitarisme économique des Serer du Sénégal. Paris, ORSTOM (Office de la recherche scientifique et technique outre-mer). 808 p.
- Gellar, Sheldon. 1976. *Structural change and colonial dependency: Senegal 1885-1945*. Beverly Hills (CA), Sage.
- Guilmoto, Christophe Z. 1997. *Migrations et institutions au Sénégal: effets d'échelle et déterminants*. Paris, CEPED

<sup>54</sup> 参照：Gellar (1982: 99), Diouf (1994: 64), 砂野 (2007, 2009)。現在ウォロフ語のテレビ放送は、フランス語を除けば約90%であり、他の主要言語はラジオの地方放送に甘んじている (Dumont, 1983, 30; Diouf, 1994: 70)。また、ウォロフ人が少数民族である隣国のガンビアでもウォロフ語化が進行しているともいわれる。

- (Centre français sur la population et le développement).
- Hanretta, Sean. 2009. *Islam and Social Change in French West Africa*. New York, Cambridge University Press.
- Harrison, Christopher. 1988. *France and Islam in West Africa 1860-1960*. Cambridge (UK), Cambridge University Press.
- Hauser, André. 1954. Les industries de transformation dans la région de Dakar. *Bulletin IFAN Série B, Études sénégalaises*, n°5, pp. 69-83.
- Klein, Martin A. 1968. *Islam and Imperialism in Senegal: Sine-Saloum, 1847-1914*. Stanford (CA), Stanford University Press (Hoover Institution Publications). xviii+285 p.
- Manchuelle, François. 1997. *Willing Migrants. Soninke Labor Diasporas 1848-1960*. Athens (OH), Ohio University Press/London, James Currey.
- Marfaing, Laurence. 1992. L'implantation des maisons de commerce au Senegal et la réaction du commerce africain. Boubacar Barry, Leonhard Harding (eds.), *Commerce et commerçant en Afrique de l'Ouest: Sénégal*. Paris, L'Harmattan, pp. 309-346.
- McLaughlin, Fiona. 2008. Senegal: The emergence of a national lingua franca. Andrew Simpson (ed.), *Language and national identity in Africa*. Oxford (UK)/New York, Oxford University Press: 79-97.
- Mercier, Paul. 1960. Étude du mariage et enquête urbaine. *Cahiers d'études africaines*, 1 (1), pp. 28-43.
- Mercier, Paul. 1965. Evolution of Senegalese elites. Pierre van den Berghe (ed.), *Africa: Social Problems of Change and Conflict*. San Francisco (SA), Chandler, pp. 163-78.
- Musset, René. 1930. La production et l'exportation des arachides au Sénégal. *Annales de Géographie*, 39 (221), pp. 554-555.
- Roch, Jean. 1975. Les migrations économiques de saison sèche en bassin arachidier sénégalais. *Cahier ORSTOM*, séries. Sciences Humaines, 12 (1), pp. 55-80.
- Rocheteau, Guillaume. 1975. Pionniers mourides au Sénégal: colonisation des terres neuves et transformations d'une économie paysanne. *Cahier ORSTOM*, séries. Sciences Humaines, 12 (1), pp. 19-53.
- Senghor, Léopold Sédar. 1983. Préface. Pierre Dumont, *Le français et les langues africaines au Sénégal*. Paris, ACCT-Karthala, pp. 1-20.
- Sidibé, Mamady. 2005. *Migrants de l'archide. La conquête de la forêt classée de Pata, Casamance, Sénégal*. Paris, Institut de recherche pour le développement, coll. «À travers champs».
- Swmell, Kenneth. 1985. Seasonal agricultural circulation: The strange farmers of the Gambia. Mansell Prothero, Murray Chapma (eds.), *Circulation in Third World Countries*. London, Routledge and Kegan Paul, pp. 178-201.
- Vanhaeverbeke, André. 1970. *Rémunération du travail et commerce extérieur: essor d'une économie exportatrice et termes de l'échange des producteurs d'arachides au Sénégal*. Louvain, Centre de recherches des pays en développement.
- Wioland, François; Calvet, Maurice. 1967. L'expansion du wolof au Senegal. *Bulletin de l'IFAN*, serie B, tome XXIX, n° 3-4, pp. 604-618.
- 砂野幸稔. 2007. 『ポストコロニアル国家と言語——フランス語公用語国セネガルの言語と社会』三元社。
- 砂野幸稔. 2009. 「拡大するウォロフ語と重層的多言語状況の海に浮かぶフランス語——セネガル」梶茂樹, 砂野幸稔編『アフリカのことばと社会』三元社: 127-159.
- 田中克彦. 1991. 『言語からみた民族と国家』岩波書店。
- 木田剛. 2011. 「書評論文: Frederick Cooper 著『L'Afrique depuis 1940』(Payot, 2008年)」『アジア・アフリカ研究』, 51/1 (通巻399号)。